

立命館大学大学院応用人間科学研究科

東日本・家族応援プロジェクト関連企画

小野和子氏講演会

2014年9月10日(水) 14:40~16:10

立命館大学衣笠キャンパス 創思館3階 303・304 教室



講師：小野和子氏（みやぎ民話の会顧問）

演題：「語る」「聞く」という営みについて ―東日本大震災の波をくぐって―

—— 小野氏は、宮城県を中心に40年以上にわたって民話の採訪をおこなってこられました。今回の大震災で被災された一人の語り手（亘理郡山元町、昭和9年生まれ的女性）の次の言葉に、極限の状況の中で甦る民話の意味を思い知らされたといいます。「民話があった。形のあるものはみんな無くしたけれど、わたしには民話が残っていた。民話はわたしを支えてくれる命綱」。大震災の試練をくぐって、あらためて「語る」「聞く」という営みについて、一採訪者として考えさせられたこと、そして、遭遇したことを語っていただきます。

<講師プロフィール>

1934年岐阜県高山市生れ。東京女子大学日本文学科卒業。1958年より宮城県仙台市に在住。1970年より宮城県内の民間説話の採訪を手がける。1975年、仲間と共に「みやぎ民話の会」を結成し、採訪の成果をこれまでに500冊近い資料集と『みやぎ民話の会叢書』13集として刊行。さらに、語り手から直接「声」で民話を聴く醍醐味を味わってもらいたいとの趣旨により、1泊乃至2泊の泊りがけで行う「みやぎ民話の学校」を隔年または2年おきに開催している。傍ら、児童文学作品や翻訳児童書などを執筆。1980年から2005年まで宮城学院女子大学非常勤講師（児童文学・民話を担当）。

東日本大震災5か月後の2011年8月21-22日、宮城県南三陸町のホテル観洋において開催された「第7回みやぎ民話の学校」には、全国から200名が参加し、「津波を語る」と題して6名の被災者が自らの体験を語り、参加者同士の交流を通して「語りの力」を再認識する機会となった。現在は、「みやぎ民話の会」顧問として、宮城県内外における生きた民話を語り継ぐ活動を精力的に進めている他、全国各地で講演活動も行っている。2014年 宮城県芸術選奨受賞。主な著書に『宮城県の民話』（責任編集、偕成社）、『長者原老媪夜話』（評論社）、『みちのく民話まんだら―民話のなかの女たち―』（北燈社）、『ひかりのたね―あの時代を生きた少女の日記』（汐文社）他。